さぁ商売をはじめよう！

act.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さぁ商売をはじめよう！

【Ｎコード】
Ｎ６９５３Ｑ

【作者名】
ａｃｔ．

【あらすじ】
自分がどうやって死んだか解らないまま、白い部屋に居た主人公。その部屋で一人の少女と出会い、次の『生』への選択を問われる。ある人生プランを掲示され、それを承諾し、少女と二人異世界へと旅立つお話。
彼はそこで昔からの夢を叶えようとするが・・・！

act. 001（前書き）

新作です。
少しでも楽しんで頂けるなら幸いです。

act. 001

お金を稼ぐ方法はこの世界では幾らでもある。
だが、それを出来る人と出来ない人が居たりする。
そこの違いはだいたいやる気の有無に出て来るわけで、才能はまた別だと思う。
今回の主人公はどうかというと、やる気が無かった。
楽してお金が稼げる方法なんてそこら辺の道端に転がっているわけでもなく、かと言って誰かの元で働くのはイヤでイヤで仕方なかった。

彼は元々、色々なアルバイトをしていたが一番厄介だったのは、キャバクラのボーイとして6ヶ月働いていた。
しかし上手い具合にいかず、日々、キャストである女の子の機嫌を損なわないよう話をしたり、幹部の人の無駄な話と営業中に飛び交う怒声に耐えながら働いていた。

え？それくらいだったら別に良い？
はは、バカを言っちゃいけない！

幹部の人に日給貰う時、
「あ～今日あんまりやる気無いからお前の給料半分にするな？」
なんて言われた時があるか？

キャストの高飛車な女に、
「あいつ気に食わないから、明日からちょっとの間休みにしてあげたら？」
なんて言われて、自分の意思に沿わない理不尽な休日を貰った時は？

あまつさえキャストの女の子に力自慢したい客に、
「ちょっとお前、ノリで殴られろ（笑）」
って言われていきなり殴られ入院させられた事は？

そんな事をさせられても何で６ヶ月も続けていられたか・・・。
理由は単純だ。
「お金が無かったから・・・」
今だって家賃滞納しているし、光熱費だってもちろん・・・。
もっと上手いやり方が沢山あったかもしれない。
しかし、世の中結局、お金なのだ。
お金が無きゃ警察を呼ぶことも、弁護士を呼ぶことも、実家に帰省するのも全部出来ない。
ましてや生きる事さえも。

なんにしてもあの日までの自分は、まさしく人生の底辺・・・から更に下の底辺を支える人だっただろう・・・。
でも間違いなく自分は生きていた。
一生懸命。
そして変化は突然訪れた。

それは目覚めと同時だった。
「・・・ん？」
知らない白い天上。
知らない白い壁。
知らない白い床。
知らない白い毛布。
知らない真っ白なシーツ。
そして・・・小さな机の上に緋い薔薇が一輪。
「どこだ・・・ここは？」
とりあえず、知らない部屋に自分は居た。

何かの嫌がらせをやられたとその時は思った。
昔、過去に寝ている時に起きたらゴミ捨て場にベッドごと移動されられた時があったからだ。
しかも、キャバクラの幹部の人に・・・。
面白そうだったから！という理由だけで。

どこのガキだよ！！

という言葉をぐっと飲み込み、怒りに震える手を全力で壁にぶつけた時があった。
今回も、同じような事をされたのだと思った。
だからこんな言葉が普通に出た。
「専務～！いい加減にしてください！早くここから出してください～！」
「・・・」
その言葉に誰も反応しなかった。
てっきりどこかに監視カメラが設置されているかと思って辺りを見回してもそれらしき物も無い。
そして部屋から出ようと立ち上がった時、言葉を失った。
「扉が無い・・・」
その部屋の真っ白な壁には扉が無かった。

ａｃｔ．００１（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

act. 002

部屋のあちこちを調べ続ける事1時間と34分・・・。
腕につけてある時計をチラリと目を向け、一つ溜息を漏らした。
「なんなんだ・・・ここは・・・」
今はもう慣れたが、最初は白色との相乗効果で部屋自体が眩しく目がチカチカして仕方が無かった。が、部屋には蛍光灯などの電気装飾などは一切なく、何故こんなに明るいのかさえ理解が出来なかった。
「一体どこなんだよ！全く・・・」
そう呟くもの自体は一変せず、頭を抱えてベッドの端に座り込んだ。
「ただの嫌がらせなら早く終らせて欲しいな」
と純粋に思ったのであった。
それから数十分後、彼は白いベッドの上で寝転んでいた。

自分で入った記憶が無いから誰かがここに閉じ込めたのだろう。
そしてわざわざ自分をこんな部屋に閉じ込めるのだから、何か目的があって寝ている間に誘拐みたいな事をしたのだろう。
それらから導き出される答えは単純だ。

―――寝て待つしかない。

単純すぎるかもしれないが、それ以外に何が出来るだろう？
この部屋で異色とも言える緋い薔薇を一片ずつむしって「出れる、出れない、出れる・・・」なんて花占い紛いな事でもやるべきか？
それこそ無駄な行為以外なにものでも無い。
だから彼は待つことにした。
自分に降りかかった唐突な変化をもたらした者を。
「まっ・・・きっと専務達だと思うけどね・・・」

あの憎い自分の上司の顔を浮かべながら、また一つ溜息を漏らした。
そして彼はまた深い眠りについた・・・それは単純に日々の疲れが促したものだった。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・

「そろそろ起きてくれないかな？」
「・・・」
「なぁ？起きてくれないか？」
肩を揺すられる感覚に目を覚まし、その主を見上げた。
「・・・ん？」
「ようやく目覚めたか・・・」
軽く目を開けて視線を向けると、まだ幼さが残る白い服に身を包む少女がこちらを覗き込んでいた。
「誰だ、キミは？」
一つあくびをしつつ時計に目をやると最後に時計をみてから約五時間も過ぎていた。
「・・・すまない、私に名は無い。与えられる身分でもないしな・・・」
少女の顔に影が射したが、それを気にしていたらキリが無いので彼は早速本題を切り出した。
「ふぅ～ん、まぁ良いや。色々と聞きたい事があるんだけど良いかな？」
「・・・ああ、だいたい質問の予想はつくが良いぞ？」
「とりあえず、ここはどこだ？」

そこから彼と少女は約一時間もの時間をかけて話し合った。
彼が抱える疑問などは全て少女が親切かつわかり易く答えてくれた

為、好感が持てたのだった。
要約すると次の通りになる。

自分は既に死んだ身であり死亡原因は教えて貰えなかったが、死んだ者は例外無く皆この白の部屋に強制召還されるらしい。
そしてこの部屋で次の『生』への確認を取るらしい。
輪廻転生と言った方が良いだろうか？こういった形で前世があるという事が証明されるとは思わなかったが・・・。
もし次の生を希望しなかった場合、このまま存在が消滅し無へと還るらしい。
生を希望する場合、何種類かのプランが提出されそれに沿って新しい世界へと飛び立つ事となる。
だいたいこんな感じの話だった。
他にも色々と質問したが、主な話はこれにまとめられていた。

「さて、どうするかな・・・」
彼は悩んだ・・・生前が生前だけに頑張った分だけ報われる環境で育ちたいが、それは完全ランダム性という事なので、とても難しいという話だった。
運が良ければお金持ちの家に生まれ一生働かなくても良い楽な生活が出来るが、逆に最悪の場合は産まれる前に死に、直ぐにこの部屋に戻ってくるケースも最近増えているらしい。
「まぁあの世界じゃそれが日常茶飯事か・・・」とある意味納得してしまった部分もあった。

「「・・・」」
何分かの沈黙の後、最初に口を開いたのは少女の方だった。
「・・・もし答えが出なかった場合、最近我々の間で認められたプランがあるのだが・・・」
「それはなんだい？」

「『異世界』と言う物の存在はご存知か？」

異世界。

それは、彼にとって新しい人生の予感をハッキリと形付けたのだった。

ａｃｔ．００２（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

act. 003

「異世界？」
「そう、異世界だ」
得意げな顔で語る少女の顔を見て、笑ってしまいそうになったがそこは堪えて質問を続けた。
「それはどういう世界だ？」
異世界という言葉は彼自身知っていた。
だがそれは、あくまでも想像上の世界。
魔法やドラゴンと言った物が普通に出て来る架空の世界。
小説を見て思いを馳せる場所でしかない。
「その考えで間違ってないぞ？」
「・・・え？」
記憶を読まれた？
「すまないが『生の選択』を悩んでいる時から思考を読ませてもらった」
「おいおい、冗談だろ！」
人の思考を読むという行為に驚くよりも先に、怒りが出てしまい思わず立ち上がった。
「す、すまん、悪いとは思ったんだが、我々の立場ではそれも必要となるのだ」
「あん？！」
さらに彼が凄むと、ビクッと肩を震わせ今にも泣きそうな表情になってしまい、彼の怒りも徐々に沈静化してしまった。
「生前の世界に嫌気がさして、生の選択を放棄する者が最近多いのだ・・・故に思考を読み、それに沿って、出来る限りお主達にも最良の選択の掲示をするようになったのだよ」
「・・・そうなのか」
「ぁあ・・・自殺は元より『もう疲れた』と言って無に還る者・・・

幾度となく見てきた」
悲しみが少女の顔に浮かび上がり、彼は何も言えなくなってしまった。
「「・・・」」
重苦しい沈黙が二人の間を支配した。
「とりあえず、話を続けてくれ」
沈黙に耐えられなくなり、少女に話を促した。
「あ・・・ぁあ、先ほども言ったとおり別に新たに産まれる場所は別に同じ世界で無くても良いんだよ」
「じゃオレが望めば魔法が支配する世界に行けると？」
「そういう事だ。だが、魔法の世界に行ったからと言って必ずしも魔法が扱えるようになるわけではない」
「それも完全ランダム性って事だな？」
「うむ」
それなりのリスクは伴うが、面白そうな世界なのは間違いない。
だが、それでも・・・。
「人間である為に仕方が無いとは言え、欲深い事だな」
「・・・」
少女が思考を読んでそう言ったにも関らず、彼は何も言わなかった。
「不安か？生前と同じような環境下に置かれる事が・・・」
「そうだ」
間髪入れずに言い切る彼を見て少女はなんと言えない表情を浮かべた。
そして彼にこう告げた。
「なら、最後のプランを掲示しよう」
「最後の？」
「うむ。そしてこれが受け入れられない場合、お主は是非もなく無に還る事となる」
「という事は、まず掲示されないプランと言う事だな？」
「理解が早くて助かるぞ。そうだ、これは実際おぬし達と接触を図

る我々の任意で言うか言わないかが決められるプランだ」
「へぇ～面白そうだな」
「だが、受け入れなかった場合のリスクだけではない、受け入れた後もそれ相応のリスクは伴うわけだが覚悟はあるか？」
そう言われて、彼は一瞬の思考にふける。
今回の自分の人生を思い返した。
親しかった友人。
励ましてくれた彼女。
支えてくれた両親。
それが走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

そして、それが過ぎ去った後に彼は目を開き、力強く少女に向けて言った。
「話を聞こう！」
「よろしい、では・・・」
それが最良の選択だったかどうかは解らない。
しかし彼は選択したのだ。

―――最初から『最良の選択』なんて物は世の中には無い。
選択した物を自分の中での最良に導く事が『最良の選択』なのだ。
威厳に溢れた父の最初で最期の教えを少女の話を聞きながら彼は思い返していた。

ａｃｔ．００３（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

act. 004

話を聞き終え、彼は一つ溜息をついた。
少女も話がようやく終えて一息入れようと白い椅子に座り一つ息を漏らし、彼に問いかけた。
「考えは変わらないな？」
「ああ、行こうじゃないか！その異世界に」
不安が無いと言えば嘘になる。
だがそれを覆い隠して希望が満ちていた。
元々面白い事が好きなのだ。
ましてや空想上だった魔法が扱えるようになるというと尚更。
「そう言えば名前を考えないとな・・・」
「ん？なんのじゃ？」
「キミのだよ」
「我の？」
「だってそうだろう？これからオレのパートナーになるんだ。名前が無いといざと言う時呼びにくくて仕方ないだろ？」
「まぁそうだが・・・良いのか、我で？」
「ああ、キミが良い・・・」
そう微笑みながら言った彼を見て少女は全身を真っ赤にさせて顔を伏せた。
「これがタラシと言う奴か・・・」
「何か言ったか？」
「なんでもない！！で、何にするのじゃ？」
少女がそう言うと彼は「そうだなぁ～」と考え込み思案に耽ったのであった。

「・・・アネモネ」
「あねもね？」

「そうアネモネだ！まぁ母親が好きな花の名前からだけどな」
「ふむ、まぁ良いだろう」
「ありがとう、アネモネ」
そう言われてアネモネは再び全身を真っ赤にさせたが、彼は気にする様子も無く立ち上がった。
「では行こうか、アネモネ？案内の方頼むな」
「ああ、任せとけ！」
そう言ってアネモネも彼を先導すべく立ち上がり白い壁にそっと手を置き、扉を呼び出し、開け放ちこう言ったのだった。
「ここから先がお主にとっては新しい世界じゃ。鬼が出るか蛇が出るかお主次第」
どっちもダメじゃんか・・・という言葉を彼はぐっと飲み込んだ。
「我も協力しよう！お主の選択が間違いでなかったという事を。そしてお主の未来が輝けるように！」
意気揚揚と語るアネモネを見て彼はこう付け加えた。
「それじゃ駄目だ」
「なに？」
アネモネの表情が見て解るほど落胆に染まったのを見て、彼は慌てて言葉を続けた。
「勘違いするな」
そう言いつつアネモネの頭に手を置いてさらにこう言った。
「オレだけじゃ駄目だ。アネモネも含めた俺たち・・・だろ？」
「・・・・・・」
不意にアネモネの瞳から涙が流れ落ちるのを見て、彼は何か自分が間違った事を言ったと思ったが、どうやらそれは杞憂だったらしい。
「バカモノめ・・・」
そう言ったアネモネの顔は満面の笑みが浮かび上がっていた。
「ふふ・・・」

そして二人は手を繋ぎ、扉をくぐる。

――――そう言えばお主の名前を聞いてなかったな？

――――もう知っているんじゃないのか？

新しいスタートを切った二人は眩い光に包まれ。

――――バカモノ！こう言う時はちゃんと名乗るものだろう？

――――そうだったな、ごめん！んじゃ改めて、オレは・・・・・・。

希望を抱き、異世界へと旅立った。

ａｃｔ．００４（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

Side. Anemone

我々に与えられた使命はたった一つ。
死んだ人間・・・いや、生物への『命の選択』をさせる事。
それだけだった。
だが、ある日を境に使命が二つに増えた。
『命の選択』をさせ、出来る限り次の『生』を選ばせる事。

理由は単純だった。
昔はあれほど生への渇望があった生物が、最近になってそれを放棄するという事態が増えてきているのだ。
我々にはその理由は解らない。
いや、解らなかったと言った方が正しいだろうか。

生物の思考を読む権限を与えられ、その生物が望む世界へのプランを掲示する。

大体の生物の思考はわかり易い。
自分の経験を元に、次に生まれ変わった時への損得を考えるのがほとんどだ。
個々で損が多い道を歩んできた者は安直に無へ還るケースが多い。
その逆も然り。
たまに現れるのがこれまた厄介なのだが、生前、大罪を働いた生物だ。
多くの生物を殺め、死してなおも反省が無く、あまつさえ我々に襲いかかろうとする生物だ。
その場合は是非もなく無に還している。
こういった輩は、生まれ変わっても同じ事を繰り返す事がほとんどだからだった。

そして、彼は我々の前に現れた。
他の生物と大差ない、安直な考え。
生への執着が無い男だった。
だが、何故かは解らないが我々・・・いや、我は彼に何か惹かれるものがあった。
それが何だかは今の我には理解できないが、彼だけは生の選択を選んで欲しかった。
故に我にとっては初めてとなる最終プランを彼に掲示した。
それに彼は乗ってくれ、我は心の底から嬉しい気持ちに浸れたがその正体は未だに不明。
今はまだ解らなくても良かった。
最終プランの内容の一つに、我々の誰か一人が同行するのが義務付けられる。
彼と一緒に行動すればその不明な部分も自ずと解るだろう。

彼は我に名前を付けてくれた。
『アネモネ』
我々にとって名前とは意味を成さないものと考えられている為、必要性を感じなかったがそれは違うのだと悟った。
名前を呼ばれる度に体の奥に沸く温かい物。
これまた正体不明だが、決して嫌ではない。
むしろ嬉しい感情が沸きあがるのだ。
日々、淡々と同じ事を繰り返す内に失われていた感情が再びこうして芽生えた喜び。
これほどまでの事は過去になかった。

彼と出会えて良かったのか・・・。
彼に与えられた名前と、再び芽生えた感情。

これが良い事だったのか、悪い事だったのかは解らない。
だが今は少しでも彼と肩を並べ歩けたら良いと思う。

―――死が二人を別つまで。

そんな言葉は今の我等には不要だ。
彼が例え死んでも我がいち早く彼の元へ駆け寄り、生の選択をさせるのだから。

もし彼が無へ還る時は・・・。

Side. Anemone（後書き）

ここで、前フリとなる話は終りです。
次回からようやく本編に入りますのでヨロシクお願いします。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ａｃｔ．００５（前書き）

ようやく本編です。
が、説明が長くなったりと？

act. 005

『商売』と言っても多方面に分類はある。
空想上でよく描かれるものでは武器屋、防具屋、魔法屋などなど多々ある。
だが、その裏側では絶対あるはずの『交易』と言うものを忘れがちになる。
例えば武器や防具は鍛冶屋に行けばいくらでも造ってもらえるだろう。
だが、その鍛冶屋は鉱石豊かな山間に必ずしもあるとは限らず、結局は誰かから買う場合がほとんどだ。
この世界では、鍛冶屋に関して言うと調べたところによると7：3の割合で交易によって買い付けるお店で占めていた。
残り3の部分は冒険者や小遣い稼ぎで持ってくる人から直接買い取るか、鉱山から直接採取して製造販売している。
食品店などは自家栽培している店は無く、予想通り農家と直接契約するか外部から持ってこられた野菜や肉を買い付け調理していた。

―――行商人。
―――旅商人。

意味の違いはささいだが、彼らを指揮し運営しているはずの『交易商』はこの世界に無い事が驚きだった。

―――なら作れば良い。

と思い行動しているが、この世界に来てまだ1年目。
世界の半分も周れて居ない自分にとっては、なかなか難しい話であった。

問題点は解っている。
まず一つ目は、完璧な資金不足。
この世界では銅貨、銀貨、金貨の３種類の貨幣が世界共通で存在している。
これはギルドと呼ばれる冒険者斡旋所で依頼完了代金が支払われる際に、イザコザを防ぐ為に共通貨幣が義務化された。
もし世界に点在する国が各々独自の貨幣を作り、どこかの国で国営が傾けば貨幣の質は落ち、その価値は意味が無くなるからだ。
その影響を一番受けるのが商売を営むお店や、世界にこれまた点在するギルドだった。
過去の反省を踏まえた上でギルドが先頭に立ちようやく統一化が図れたという話だった。

そして二つ目の問題点はシステム面。
『相場』という言葉がある。
例えばどこかの街で疫病が発生したとしよう。
疫病を治すには衛生管理はもちろんの事、薬が必要となる。
街での薬の消費量は一気に高まり、薬が不足するという問題が発生する。
その土地に住む人にとっては死にたくないので、どんなにお金を払っても薬を買い求める。
そうすれば最悪、今まで銅貨１枚で買えていた薬が金貨１枚で買い求めるまでに高騰する。

―――ボロ儲けだろ？

逆に鉱山が豊かな場所に鉱石を売った所で、利益はマイナスになるのが常だ。
それこそ世界的に見て希少価値が高い鉱石以外は・・・。
こうした一連の価格変動を『相場』と呼び、商売をやるにあたって

必要不可欠なものとなる。

ある人はこう言う『相場は生き物』だと・・・。
うまい事を言ったもんだと今更ながら思う。
頭である程度解っていてもそれらを実際に把握、そして管理するのを1から築き上げるのは生半可な努力だけではどうしようも無い。
それでもある程度、管理しきれるようにこの異世界の各地を周り特産物などを調べているわけだが、下手すると調べたまま人生が終る気がしてきた所だった。

そして3つ目の問題は拠点であった。
行商人や旅商人をやりながら商売しつつ相場を把握する事もある程度可能だが、それにはやはり限界がある。
店を構え、人を雇った方が効率は良くお金稼ぎが出来る。
この異世界は便利な物で、魔法と言うのがある。
聞けば遠距離通信が出来る魔法も存在するらしく、それを使えばその街の状況などいち早く知る事が出来る。が、あまり普及されていないらしく普通に使われる魔法に比べて相当高価な物となっている。
それこそ国が緊急事態で使うケースが常らしい。
でも、もし使えるならいくら高価であってもその元手は十分取れるわけでそれを念頭に、動ける場所を今模索している。

一つだけ店を構えたい街の候補はある。
だが、その街は問題だらけで、とてもじゃないが無理なのだ。

『奴隷都市』
この異世界では奴隷制度はほとんどの国で認められている。
故に奴隷市場の売り上げは日々一定か右肩上がりであり「世界で一番儲けている商売人は誰か？」と聞けば「奴隷商人でしょうね」と

皮肉めいた笑みで言葉が返ってくる。
世界に点在する国々のど真ん中に存在する都市であり、交易などを考えた場合ほぼ全ての街や村を網羅できる位置づけでありながら、日々奴隷が売り買いされる場所・・・それが奴隷都市であり、勿体無いとさえ思う。

もし商業都市に出来るなら・・・。
そんな夢想を抱いてしまうのであった。

ａｃｔ．００５（後書き）

作者はこれからの話の流れと商売の仕方を模索し、主人公もまた商売の仕方を模索中。
無い知恵を振り絞って頑張りますっ！

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 006

商売のやり方は簡単である。
一つの事さえ覚えておけば良い。
出来る限り安く品物を買い、出来る限りその品物が高く売れる場所に売りつければ良い。
それだけなのだ。

「いらっしゃーい！新しく若いエルフの女が入ったよー！今なら金貨2枚からでどうだいー？」

「よう、兄ちゃん！若い竜人の剣闘士が居るけど護衛役にどうだい？」

「ねぇねぇ、お兄さん、夜のお供に私なんかどう？」
「私が居るから大丈夫だ！！」
ガルルルとアネモネが今にも噛みつかんばかりに、誘ってきたダークエルフの女を威嚇する。
「あらあら、可愛いお嬢さん・・・お嬢さんも一緒でも良いのよ？」
「なっ？！」
そう言われたアネモネの態度は分り易く、ビクッと体を仰け反らせて驚愕の表情を浮かべた。
「ふふふ、可愛いわねぇ～」
「ひっ？！」
ダークエルフの女性が笑みを浮かべながらそっとアネモネの頬を触ろうとするのを制した手があった。

「いや～申し訳ない。遊ぶのはそこら辺までにして置いてくれませんかね？」
「と、灯馬～～～！」
声を聞いて正気を取り戻したのか、灯馬の傍に駆け足でかけより腕にしがみつくアネモネだった。
「あらあら、そんなに逃げなくても良いのに・・・」
「五月蝿い！とっとと去れ！このバカモノが！！」
そう吼えるアネモネを灯馬はなだめつつ、
「そういう事なんで申し訳ないですが・・・」
「残念ね・・・機会があったら寄って頂戴ね？」
「ええ、機会があれば・・・」
灯馬のその言葉を聞き、名も知らないダークエルフの女は満足そうに一つ頷いて去っていた。
「機会なんて作ってやらないからなっ！」
今度は灯馬に吼え始めたアネモネが居たのであった。
「灯馬、もうこの街を出よう！こんな街で店を構える必要なんてないぞ！」
「う～ん・・・そうなんだけどな、でも自分で考える中ではこの街が最高なんだよ」
「しかしだな灯馬、さっきみたいな輩はもちろんだが、この都市の約八割は奴隷商売なのだろう？そんな所で奴隷を扱うつもりがないお前が商売した所でなんの得も無いと思うぞ！」

そう言うアネモネを灯馬は苦笑を浮かべながら聞いていた。
彼らが今居るのは『奴隷都市』と呼ばれた総人口数万人からなる都市だった。
とは言っても、総人口の七割は奴隷の烙印を押された者ばかりなわけだが・・・。
数ヶ月前に一度灯馬達は、この都市に足を踏み入れたが手痛い歓迎を受けたため嫌煙しがちだったが、今回ある確信めいた二つの噂を

聞きつけて再びこの都市に来ているのであった。
その内の一つは・・・。

「まぁ今から行く物件は、どうやら新しく競売(オークション)にかけられるみたいだからまずその様子見からかな？もしかしたら買うかもしれないけど」
「ほぅ～それは楽しみじゃな。場合によっては我もお主の手助けをするぞ？」
「ありがとう。でも不正はダメだよ」
「しかし・・・」
「百聞は一見にしかず。まずは物件を見てから決めようか」
「むぅ・・・」
最近、今一灯馬の力になりきれていないせいか、アネモネが厳しい表情を浮かべる。
灯馬が異世界に来て一年目・・・。
最初の頃は、ほとんど全てが知らない事だらけでアネモネに頼りっきりだったが、なれてきたせいもあって最初の頃と比べてアネモネに頼る事はほとんど無くなっていた。
それでも日々、何とか灯馬の力になりたいと目に見えて解る為にお互いになんとも言えない感情に浸る事が増えて来たのだった。

そんな気まずい空気を払拭するかのように灯馬は見えてきた今回の物件に声を明るくして言った。
「お、どうやら見えて来たみたいだよ？」
「ほぅ～アレか、中々しっかりした家じゃな」
一際目立つ大きな木造で建てられた家だった。
三階からなるそれは普通に見れば裕福な層が住む温かそうな家だった。

「・・・いらっしゃいませ」

家に近づくと突然背後から声をかけられ、灯馬とアネモネはビクッと体を震わせ慌てて背後を振り返った先にはまだ若い人間の女性が立っていた。
着ていた黒い礼服はどこか冷たい印象を抱かせ、そして何よりも一番目についたのは首と腕にそれぞれ付けられた奴隷の証である呪具だった。
「えーっと、貴女は・・・？」
「私は今回、この物件を売り出すにあたって主人に変わり主催を勤めるカナリアと申す者です。競売へ参加する為にこちらへ？」
淡々と語られる言葉は有無を言わせぬ迫力があった。
「はい、一応は・・・ただ、今日来たばっかりなので中を見て構いませんか？」
「ええ、どうぞ。もし宜しければご案内致しましょうか？」
「じゃお願いします」
灯馬はそう言って少し微笑み、アネモネは「こやつ出来るな・・・」と少し警戒心を露わにしていた。

ａｃｔ．００６（後書き）

今回はいかがでしたでしょうか？
キャラクターの名前を考えるのは苦手です。
最後の方に出てきた「カナリア」という名前も考えるのに約１５分かかりましたＹＯ！！

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 007

それから約三十分かけてカナリアによって丁寧に建物の中を案内され、三人は今、入り口に立っていた。
一階は主に大衆用の食堂向きの構造で、二階と三階は各十部屋ずつからなる宿泊施設向きの構造であり、よく物語で登場する酒場のイメージの方が強かった。
それらの構造は灯馬が頭の中で描く店の構造とは違うため落胆は隠せないで居た。
「う～ん・・・」
「灯馬、御主が思い描いていた建物とは違うようじゃの？」
灯馬の心境をある程度理解しているアネモネが少し控えめに尋ねてきた。
「そうだね～」
今の灯馬の全財産を叩いた場合、この建物はほぼ確実に手に入るであろう・・・しかし、買ったとしても後に続かないというのが問題なのだ。
それは灯馬が考える店にする為にかかるリフォーム金であったり、品揃えをする為にかかる費用であったり多々ある。
そういった事を考えた場合どうしても資金が底を尽き、根城の無い灯馬の様な旅商人にお金を貸してくれる宛もあるはずが無かった。

「お気にめさなかったようですね」
「え？あ・・・はい、申し訳ありません」
考え込むと誰が近くに居ようと、自分の世界に入り込んでしまうのは灯馬の悪い癖だった。
そのせいでカナリアという存在をすっかり忘れていたのであった。
「そうですか・・・それでは仕方がありませんね。ついで・・・と

言ってはアレですが、灯馬様はどんなご商売をするおつもりですか？」
三十分前に出会った時とは変わらないポーカーフェイス。
灯馬はカナリアが、どういった意味でそう聞いてきたのか意味を掴みきれないで居た。
「・・・」
一瞬の沈黙。
そしてカナリアが続けて口を開いた・
「他意は別にございません。ただ、新しくこの都市でご商売をする方がいらっしゃるようなら、その方の要望には極力応えるように主人から仰せつかっておりますので・・・」
――――むしろ、全ての要望にお応えできます。
彼女から放たれる雰囲気がそう物語っていた。
カナリアが信用に足る人物かどうか・・・そう言った形で入った思考は再び彼を悩ませた。
彼がやろうとしている事は、この世界では新しい試みだ。
下手に信用できない人物に灯馬がやろうとしている事を話すという行為は、手品で予めトリックの仕掛けを話すようなものだった。
灯馬にはまだ理想を実現できる力も資金も無い。
が彼女・・・いや、彼女の主人はどうだろう。
これだけ豪華な家の販売を取り仕切り、隙があれば他の物件をも紹介しようとする。
この都市では有力な富豪なのだろう。
あちらの世界で言うところの不動産業と呼ばれる職業についているのだろうか。

協力を得られればこれほど心強い味方は居ないが、全てを喰われる危険性を秘めている。

――――言うなれば・・・。

「この話はご存知ですか？」

「え？」

灯馬の思考を遮るように問いかけたのはやはりカナリアだった。

「この世界で行われている商売は多々あるわけですが、その行われている商売の約七割は今しがた紹介した物件でまかなえるようになっております」

「・・・」

「それらは例えば宿屋や飲食、酒場、武器防具屋があります。そして残り三割は鍛冶、彫金などの職人業、またはこの都市で行われている奴隷業、そして冒険ギルドです」

そして一呼吸置き、続けざまにこう言った。

「これはあくまでも私の感ですが、何か新しい商売を思いつき、そしてそれを実行しようとされているのでは無いのですか？」

心を読めない彼女にはまだ灯馬が何をやろうとしているのかは解らないだろう。

だが、その言葉は絶対的な確信の元に言ったのだと灯馬には安易に予想はついたのであった。

ａｃｔ．００７（後書き）

今回のお話はいかがでしたでしょうか？
なかなか話がまとまらず苦戦しました。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6953q/

さぁ商売をはじめよう！

2011年3月20日22時29分発行